

澤田 肇・北山研二・南明日香共編

## 『パリという首都風景の誕生』

——フランス大革命期から両大戦間まで——

上智大学出版 二〇一四・五刊

A5 三二七頁 三七〇〇円

本書は、パリが近代ヨーロッパを代表する都市となるにいたるまで、どのようにその「首都風景」を構築していったのかという問題に、社会・経済・思想・建築・芸術・文学のそれぞれの専門領域から取り組んだ論文集である。執筆者は、澤田肇氏を代表者とする科学研究費補助金（基盤C、二〇一〇年度～二二年度）による共同研究（パリという首都風景の誕生―フランス大革命から世界大恐慌まで）の共同研究者および招待研究者である。対象となるのは、副題が示すように、政治・文化の中心がヴェルサイユからパリに移り、まさにパリが首都として確立されていく、フランス革命から両大戦間の一九二〇年代までである。

本書全体は、第I部「視覚に映る都市」、第II部「計画が作る都市」、第III部「文学が表す都市」の三部で構成されており、それぞれの部は、さらに複数の章で編成されている。

第I部「視覚に映る都市」は、写真、建築、絵画、彫像に焦点を当てている。第一章（北山研二）では、風景画・風景写真を通じ、パリと変容する風景が取り上げられ、第二章（三宅理一）では、ガラスという素材と構法の革新がパリの景観に与えた影響、第三章

（林道郎）では、画家カイユボットの描く都市空間と生活様相、第四章（南明日香）では、第三共和政期に積極的に制作された顕彰記念の彫像の社会的政治的背景と、それらの記念像を見た日本人の反応が論じられている。

第II部「計画が作る都市」では、第二帝政期の「パリ大改造」にかかわる都市整備、通りや公園、宗教建築、監獄について検討されている。第一章（栗田啓子）は、首都の公共事業を担当した土木エンジニアが、いかにしてパリの衛生化を実現していったのかを扱う。第二章（北山研二）では、パリ大改造による自然観の変貌とモダン概念の具体化が論じられ、第三章（土居義岳）では、パンテオンとサクレレールといった霊性の場が政治など様々な要因によって変化する様相が、第四章（梅澤礼）では、監獄の改革が首都改造にどのような影響を及ぼしたのかが検討されている。

第III部「文学が表す都市」では、バルザック、ゾラ、さらに日本人作家が取り上げられる。第一章（澤田肇）は、バルザックの『人間喜劇』におけるパリを、歴史・小説・神話という観点からその多様性を明らかにし、第二章（小倉孝誠）は、ゾラの主著『ルーゴン・マッカール叢書』を中心に、ゾラの描くパリの諸相を浮かび上がらせる。第三章（南明日香）では、永井荷風など日本人作家たちの視点および言説から、パリの墓地について論じられている。

以上のように、本書では、さまざまな専門領域からの複眼的アプローチにより「パリという首都風景の誕生」が取り上げられている。「首都風景」というイメージが形成されるには、首都の整備、

そこで形成された景観に関する繰り返しの言及・描写、さらにそのイメージの共有など、さまざまな創造活動の蓄積が必要不可欠であることが理解されるであろう。近年、本書と同様に、ヨーロッパの主要都市を領域横断的に検証するアプローチに関心が集まっている。今後の比較都市研究の進展には、こうした全体像の検証と、それぞれの専門分野での具体的検証との往復作業が必要となるだろうが、この二つをまたぐものとして、この「首都風景の誕生」というキーワードは、有効な観点を提示していると思われる。

(寺本敬子)